

音・音楽のよさを造形科の作品として表出する授業づくり

梅比良 麻子・芦田 桃子

1 はじめに

本年度は、造形科と共同で題材を構想し、芸術という大きな括りで〈他者〉に出合い、音・音楽のよさを造形科の作品として表出する授業づくりを行った。

2 授業の構想

(1) 題材 「墨のうた ～音と色と形をつないで～」 5年生

(2) 題材デザイン

本題材では、楽曲鑑賞と墨の表現をつなげるという題材デザインそのものが〈他者〉としての大きな柱となる。音楽の鑑賞授業で曲の聴き方を深めたり、造形の授業で墨の技法を増やしたりしておくことを経た後に、それらをつなげることは、鑑賞の質を上げ、表現の深まりを促すことにつながると考える。本題材では、教科を越えて鑑賞と表現にじっくり時間をかけ、物事の見方や感じ方を豊かにする姿を音楽科と造形科の両方から目指したい。

指導にあたっては、音楽科と造形科の両方でメタ認知を促す指導を意識し、目に見えない音楽への感覚と目に見える墨への感覚がつながる楽しさを実感できるようにしたい。

音楽科においては、本時までには久石譲作曲 **summer** を鑑賞するが、最初に浮かんだイメージや曲の感じを自分の感性の出発点として言語化させることを大切にする。そして、主旋律が色々な楽器によって演奏されたり、チャイム音型やアルペジオ音型の旋律によって曲想が変化したりすることに気づかせながら、感じたことを「楽曲メモ」に少しずつ書き込ませていく。これにより、自分の聴き方や感じ方がどのように広がっていくかを確かめられるようにする。最後に全体を通して聴く際は、さらに新たな感じ方ができるように、この曲がつけられた映画「菊次郎の夏」のあらすじ（少年が母を探しに行く）を伝え、明るいだけでも暗いだけでもない楽曲の深みを味わわせる。

造形科においては、本時までには墨の様々な表し方を試し、習得できるようにする。その際、「墨の技見本」を作成し、自分の見つけた表現をいつでも引き出し可能なものとして保存しておくことで、自分の経験や技能を自分で把握できるようにする。また、本時で楽曲と墨の表現をつなげるまでに、「技見本」を作る活動に加え、言葉や音を表

すというステップを踏んでおくことで、より楽曲を表すことが円滑にできるようにしておく。本時においては、楽曲に合わせて濃淡やにじみなどの表現に自分なりの意味を持たせることができているかが重要となる。このことを自覚させるために、楽曲を聴いて感じたことをメモとして一度言葉にする音楽での活動とのつながりを重視する。

(3) 本題材の目標

- 墨の特徴や材料を生かして表し方を工夫することができる。(造)【知識及び技能】
- 楽曲のよさを見つけ、表したいことや表し方を考えることができる。(音・造)【思考力・判断力・表現力等】
- 想像を広げながら音楽を聴く楽しさや、墨による表現の楽しさを主体的に味わい取り組むことができる。(音・造) 【主体的に学習に取り組む態度】

(4) 題材計画 全7時間

音楽		題材モデル	学習内容	活動内容	造形		題材モデル	学習内容	活動内容
第 一 次	第 1 時	〈他者〉との出会い・感性を働かせる。	曲のよさを見つけ、想像をふくらませる。	音の動きや楽器の変化を聞き取る。 主旋律を覚えて繰り返しに気づく。	第 一 次	第 1 ・ 2 時	〈他者〉との出会い	技能の習得・表現方法の拡張	墨の技法を試し、「墨の技見本」を作る。
						第 3 ・ 4 時	表現を試行錯誤する	技能の習得・表現方法の拡張	墨の表現を試し、言葉や音とつなげ、「墨の技見本」を更新する
第 二 次	第 1 時	鑑賞と表現の一体化 (※本時)	音楽を形づくっている要素の動きや感じたことを墨の表現につなげる	「楽曲メモ」・「墨の技見本」を元に自分なりの感じ方を作品として表す					
	第 2 時	意味付け、価値付け 自己更新	作品鑑賞による深化	楽曲を聴きながら作品を鑑賞し、楽曲のよさや作品の良さを交流しながら味わう					

(5) 本時の目標

- 自分の感じ方を表す方法を考え、墨の技を工夫して表現することができる。

(6) 提案問題

音楽の学習で「楽曲メモ」、造形の学習で「墨の技見本」をつくったことは、自分が感じたことを墨の技に結びつけ、自分なりの表現を工夫することにつながったか。

(7) 学習過程 ※本時は、50分の授業として行います。

学 習 活 動	指 導 の 意 図 と 手 だ て	評価の観点と方法
1 自分の感じ方もしくは友達の感じ方で「summer」を聴く。 (15分)	○前時(音)の楽曲メモを元に自分の感じ方を思い出させ、曲のいいなと思ったことやふくらんだイメージを交流させる。 ○児童の発言を時間、場所、天気、出来事、感情、音楽などの視点で板書にまとめ、それらを踏まえて新しい感じ方で聴くよう促す。 ○今日聴いた時の新たな感じ方を取り上げる。	●自分や友だちの聴き方を大事にしているか(行動観察・発言)
楽曲メモから表したいことを選んで、墨の表し方を工夫しよう。		
2 「楽曲メモ」、「墨の技見本」から使いたいものを選ぶ。 (5分)	○「楽曲メモ」の中から、表現したいものに印をつけさせることで、表すことを選び取らせる。 ○印をつけたものに合った表現方法を選ぶ以外に組み合わせたり創造したりできるようにし、イメージとの組み合わせを楽しめるようにする。	●メモや技から表したいものを自分で選び取っているか。(楽曲メモ)
3 墨で表す。 (20分)	○曲を流しながら制作することで、曲との一体感を楽しんだり確かめたりしながら活動できるようにする。	●これまでの活動を元に、自分なりの表し方を見つけているか。(行動観察・作品)
4 題名(「summer」の副題)をつける。(5分)	○副題にすることで鑑賞や表現の方向や質を保ち、その上で自分の思いや表し方が伝わる題名になるようにする。	
5 本時を振り返る。 (5分)	○楽曲メモと墨の表現のつながりを伝える振り返りを残すことで、次時の鑑賞につながるようにする。	

3 授業の実際

音楽科で行った第一次の鑑賞では、自分の中で聴き方の変容が分かるように、「最初の一回」と「最後の一回」という指導言を用いて聴かせ、「楽曲メモ」に感じたことや聴き取ったことを書かせた(図1)。子どもには、予め墨で音楽から感じたことを表すことは伝えたが、題名「summer」は伝えずに一回目は聴かせ自由に感じたことを出させた。そして、改めて題名である夏を意識しながら聴くと、どのような感じ方ができるかを主学習として提示した。

展開では、①始め②続き③後半と区切り、感じたことは自由に出させる一方で、「何の楽器で演奏されているか」を問い、全体の構成を板書でまとめながら進めた(図2)。

一方、造形科の第一次では、かすれ、にじみ、濃淡などの技見本(図3)を作成させることによって技を習得させた。さらに、教師が提示したテーマ(図4)をイメージしながら描かせることによって、表したいことと技が結びつきやすいようなスモールステップを踏むことを行った。テーマは、季節、自然、文化、時間、音など、誰にとっても体感したことのある視点で構成した。図5は、それぞれの

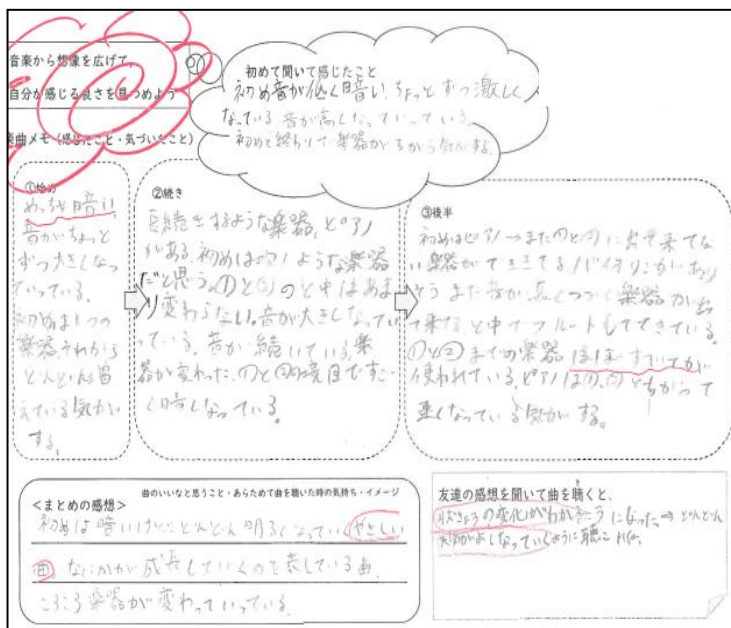


図1 楽曲メモ

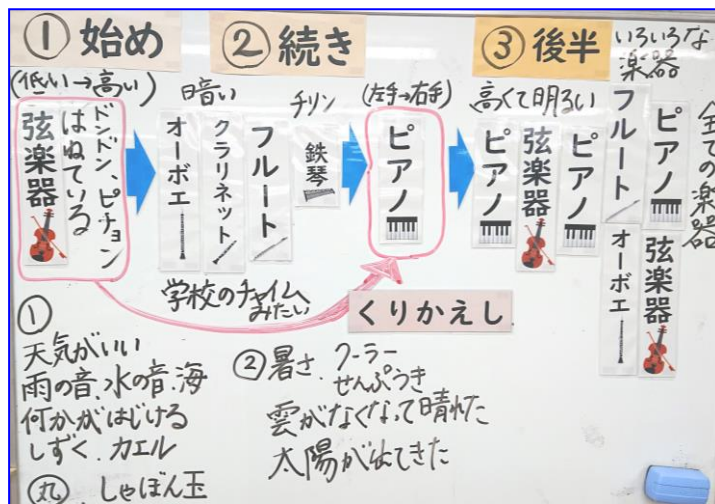


図2 音楽鑑賞の板書

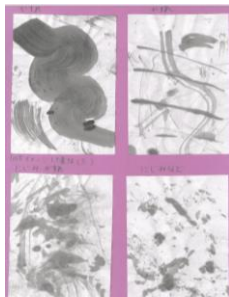


図3 技見本

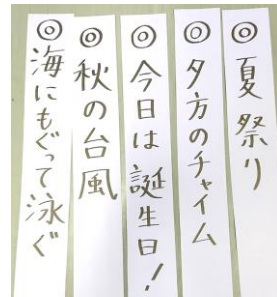


図4 テーマ

図5は、それぞれの

テーマと技を結びつけた例である。

楽曲を墨で表す本時では、もう一度楽曲メモを見ながら鑑賞し、自分の感じ方を思い起こして共有するところから始めた。板書の整理は、場所、天気、時間、時期、明暗、感情、音のことなど、色々な視点ごとにまとめていくことによって、自分にはなかった視点をで聴くことができ

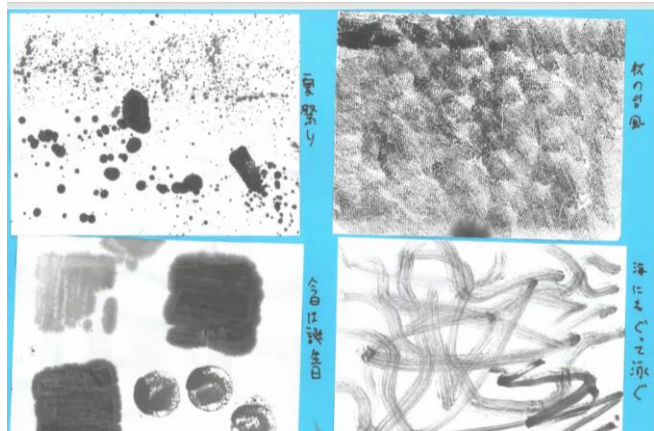


図5 テーマに沿って表した例

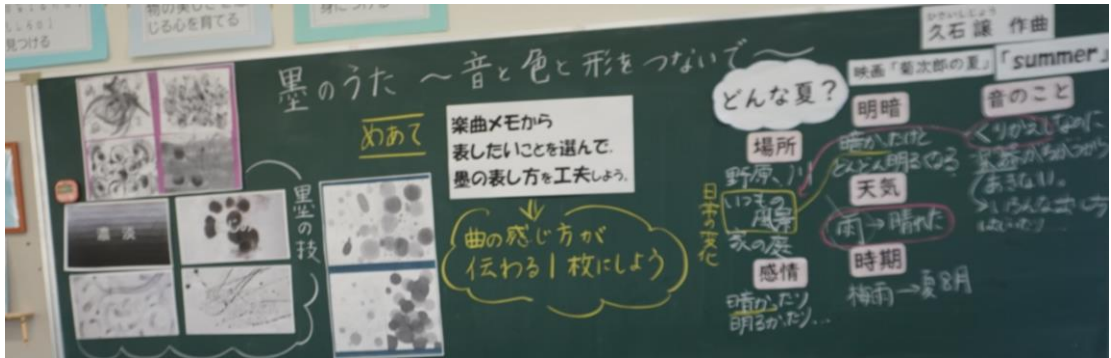
るようになることをねらった。表1は、子ども達の連続した発言であるが、子ども達なりの言葉で楽器の音色の組み合わせが変化していくことによる「オーケストレーション」や「繰り返し」によって醸し出される音・音楽の「よさ」を自覚していることが分かった。また、C2の子どもはC1の友達の発言に共感しながら「奏法の違い」による「よさ」を発言している。特筆すべき感性としては、C3の子どもはクラスの大多数が水の動きや天気などの自然をイメージしていたにもかかわらず、C1の友達の「繰り返し」の「よさ」に共感しながら、繰り返されるいつもの日常というイメージをもったという。この発言がきっかけとなって、C4の子どもはC3の友達の発言から想像を広げ、同じメロディーの繰り返しであるが少しずつ音色が変わっていくという変化を踏まえて、「毎日少しずつ変化がある日常」という形でイメージを広げていった。このような友達の色々な感じ方を踏まえてもう一度鑑賞させ、さらに感じたことを楽曲メモに付け加えさせた。

表1 本時の子ども達の発言

- | |
|--|
| C1 : 同じ音とかが繰り返されているのに楽器の組み合わせが変わっているからずっと飽きないしおもしろい。
繰り返し・オーケストレーションのよさ |
| C2 : 付け足しみたいな感じなんですけど、楽器がちがうだけじゃなくて、はじいたりひいたりとかいろんな使い方をしている。 |
| C3 : 繰り返しているのが出てきたから、いつもの風景、日常って感じ。
音楽と想像を関連づける |
| C4 : 日常っていうのが出てて、それで聴いたら、日常に付け加えて暗くなったり明るくなったりしているから、毎日少しずつ変化がある日常。 |

このタイミングで、芦田教諭と授業の進行をバトンタッチをした。芦田教諭は、イメージと墨の技を結びつけるという本時の活動に入るために、教諭自身の言葉で子ども達のイメージを受容し、言葉だけでは分かりにくいものまで墨で表すというめあて

を伝えた。また、子どもの発言を取り上げて「大切なものを探しに行くような感じでどれにしますか？にじみがいいか、かすれがいいか。明暗はどうしたらいいですか？」と全体に問い、自分で技を選んでイメージと結びつけていく例を共有した上で楽曲を聴きながら表す活動に入った。



4 成果と課題

成果と課題は、子どもの作品とふり返りを照らし合わせることによって明らかとなった。成果としては、曲から感じたイメージを小分けにしておき、ふんわりとした感じは丸や柔らかい形で表したり、感動はかすれで

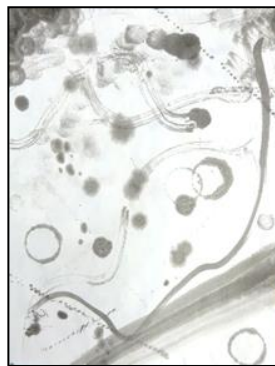


図6 副題「しずく」

表したりするなど、一つひとつのイメージを技と結びつけて描いていたことが挙げられる。課題としては、音・音楽のよさをイメージとしてではなく、ある旋律の繰り返しやピッチカート奏法などの音・音楽そのものの動きとして捉えていた子どもにとっては、イメージと技を結びつけることができていなかったことである。

極少数ではあるが、音・音楽そのものの動きを「よさ」として捉える感性を受容しつつも、自分の中にあるイメージを呼び起こして想像を膨らませていくという聴き方もできるように伸ばしていきたい。

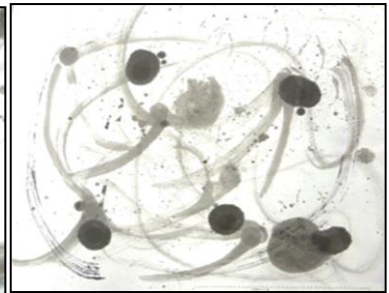


図7 副題「はずみ」



図8 副題「心の中のsummer」

5 おわりに

本年度の題材開発を通して、できあがった作品が音楽のものであるか、造形のものであるかなどの問いに捕らわることなく、それが一人ひとりの感性を大切にして豊かにしていくものであったか否かということを議論し続けていきたいと考えている。